

# 誰かの投稿が、次の参拝を生む ホトカミがひらく、神社仏閣との出会い

## 吉田 亮

1990年、滋賀県生まれ。岐阜県育ち。  
東京大学理科II類に入学後、文学部日本文学科を卒業。  
株式会社DO THE SAMURAI代表取締役。  
神社仏閣検索サイト「ホトカミ」を通じて、全国の寺社の  
情報発信と参拝者同士の交流を支えている。

境内に足を踏み入れ、門をくぐり、本堂へと向かう。その一歩一歩の中で、自然と心が静まっていく――。

デジタルが生活の中心になった現代においても、「お参り」という行為の価値は失われていない。むしろ、ネットをきっかけに、あらためて「現地へ行くこと」の意味が再発見されている。

神社・お寺の検索サイト「ホトカミ」は、そんな流れの中心にある存在だ。

今回は、同サービスを運営する吉田氏に、ホトカミ誕生の背景から、デジタル時代における信仰・歴史の伝え方で、じっくりと話を伺った。

### 投稿の動機は「利他」と「記録」

ホトカミを支えているのは、日々積み重ねられていく参拝者の投稿だ。

そこには、SNS的な自己表現とは少し異なる、独特の温度がある。

吉田：ユーザーさんに「どうして投稿しているんですか？」と何度かアンケートを取っているんですが、だいたい半分くらいの方が「神社やお寺のことを、他の人にも知ってもらいたいから」と答えてくださいます。いわゆる「利他」の気持ちですね。もう半分くらいの方は、「自分の記録として残したい」という理由です。人って、思っている以上に忘れてしまうんで

ますし、「ちよつと調べてみたら、近くにこんな神社があるんだ」と、きっかけとして使ってもらえたらいいなと思っています。

### 「公式」と「参拝者」

#### 両輪で情報が循環する

ホトカミの特徴は、検索サイトでありながら、神社側と参拝者の双方が情報を発信できる点にある。

吉田：神社さん向けには「公式アカウント」という仕組みがあって、無料で情報発信ができます。今は1700ほどの神社さんが登録してくださっています。

御朱印の案内や行事のお知らせを載せることで、「それを見てお参りに来てくれる方が増えた」という声もいただ

### 「神社とお寺を探す」

#### 入り口として

「まず、ホトカミとはどういうサイトなのか、あらためて教えてください。」

吉田：ホトカミは、全国の神社とお寺を検索できるサイトです。現在、約16万の寺社を紹介していて、月間ではおよそ100万人の方に見ていただいています。特に1月の初詣シーズンは、多くの方が利用してくださいますね。

御朱印の検索サイトとかわれがちなんですけど、実はそれだけではなくて、坐禅会や写経会、お守り、絵馬、厄除けのご祈禱など、神社に関わるさまざまな情報が見られます。検索エンジンで検索して辿り着く方もいらっしゃる

### 「フォロワー機能もあって、SNS的な側面もありますよね。」

吉田：そうですね。神社やお寺をフォローすることもできますし、ユーザーさん同士でフォローし合うこともあります。

例えば、愛知県だけで5千寺社を巡って、7千件以上投稿されている方がいらっしゃるんです。その方をフォローすれば、愛知の知られていないような寺社情報も含めて分かります。

すよね。「あのお寺、どんな感じだったっけ」とか、「あの坐禅会、どこだったかな」とか。その二つが、ちょうど半分ずつある印象です。

自分のためであり、誰かのためでもある。その微妙なバランスが、ホトカミの投稿文化を形づくっている。写真と短い文章の向こう側には、「よかった」「また行きたい」「誰かにも伝えたい」という、ごく素朴な感情がある。派手さはないが、だからこそ、画面越しに寺社の空気が伝わってくる。

## ネットは「入口」

「足を運ぶこと」の価値——デジタルがこれだけ普及した中で、実際に現地にお参りするこの価値について、どうお考えでしょうか。

所くらしいが限界で。あるとき、神社とお寺を合わせると全国に16万あると聞いて、「これは無理だな」と思ったんです。

来世でも、そのまた来世でも人生をかけて勉強しても、全部は紹介できない。そのときに思い浮かんだのが、食べログのような仕組みでした。

「このお寺の坐禅会は、初心者でも参加しやすかったよ」「この神社は、静かで落ち着く雰囲気だったよ」そういう声が集まり重なって、それを見た人が、また足を運ぶ。一人で全部を伝えるのではなく、みんなで伝えていく。その方が、現実的だし、何より続くんじゃないかと思ったんです。

「人生をかけて巡る人たち」がいるホトカミには、驚くほ

吉田…きっかけは、ネットがいいと思っているんです。むしろ、ネットがないと、そもそも知るきっかけすら生まれないことも多い。以前、あるお寺の方がおっしゃっていた言葉が印象に残っています。

「ネットに情報が載っていないお寺は、存在していないのと同じだ」と。少し極端かもしれませんが、入口としての情報発信は大事だと思います。

ただ、やっぱり実際に足を運ぶと、全然違うんですね。門をくぐって、境内を歩いて、本堂へ向かっていく。その動線自体が、自然と心が落ち着くように設計されている。生垣の配置だったり、視線の抜け方だったり、建物の位置関係だったり。立ち止まって、歩いて、手を合わせる。その一連の体験があつて

ど熱心なユーザーも少なくなっていく。

吉田…例えば、千葉県だけで8千寺社を巡っている方がいらっしゃいます。投稿数も、それと同じくらい。

その方、普通に平日はお仕事をされている30代の方なんです。駅から歩いて、土曜日にお参りされる。一日に20〜30キロ歩くこともあるそうです。

日曜日は身体を休めながら、ホトカミに投稿する。会うまでは、白髪のひげを生やした仙人みたいな方を想像していたんですが、実際は同世代の30代の方で驚きました。

そういう方が、千葉だけでなく、愛知や三重など、各地にいらっしゃる。誰かが担当しているわけではなく、それぞれが、自分のペースで続け

こそ、お寺という場所の意味が、身体感覚として伝わってくるんだと思います。

## 16万寺社を前にして、生まれた発想

ホトカミは2017年にサービスを開始し、現在では、全国規模のプラットフォームと

して知られる存在になっているが、最初からその形が見えていたわけではない。

吉田…もともと、3年くらい神社ツアーやお寺でのイベントをやらせていただいていたんです。平日は勉強して、土日に案内する、という生活でした。でも、どれだけ頑張っても、紹介できるのは10数カ



ホトカミ立ち上げ当初を振り返る吉田氏。

ている。その投稿を見た人が、「いいな、私も行ってみよう」と思う。そうやって、少しずつ広がってきました。

## 御朱印は「きっかけ」その先にある大切なもの

話題は、三重県津市にある曹洞宗・四天王寺の御朱印へと移った。

吉田…四天王寺さんの御朱印は、毎月デザインが変わっています。私たちがデザインのサポートをさせていただいているんですが、派手にすればいい、というものではないと思っています。大事にしているのは、ちゃんと意味があること。四季を感じられること。毎月お参りしてくださる方が「今月も来たな」と感じられること。



三重県津市・曹洞宗四天王寺の秋の御朱印。四季と歴史を意識してデザインされたという一枚。

「今月も来られた」ということが、自分の健康の証になる。そういう話を聞くと、御朱印は、単なる収集物ではないんだなと感じます。  
目を引くきっかけとしての役割は大事ですが、その背景にある歴史や物語を、ちゃんと伝えることが、もっと大事だと思っています。

### AI時代に、寺社にしかできないこと

吉田…これは完全に自論なんです。AIがどれほど進化しても、「歴史」は生成できないと思っています。同じ名前のお寺や神社はたくさんありますけど、できた理由は全部違う。誰かが、強い思いを持って、「ここに建てよう」と決めた場所です。「うちのお寺は、なぜ作られたのか。」

その歴史は、その寺社だけのものです。それを、今の人たちに、ちゃんと伝えていく。それができるのは、お寺や神社しかないんじゃないかなと思います。

### 初心者への、たった一つのアドバイス

「これから御朱印巡りを始める方へ、何かアドバイスはありますか。」

吉田…一つだけです。御朱印帳を、持ち歩くこと。カバンに入れるか、車に入れておく。それだけでいい。あとは、深く考えなくていいと思っています。ホトカミを開けば、近くの神社やお寺も、御朱印の有無も分かる。まずは、近いところから行ってみる。そこから、自分なりの楽

しみ方が、自然と見えてくるはずですよ。

### 取材を終えて

#### 自分の「記録」が誰かのために

人は思っている以上に忘れてしまう。「あのお寺はどんな場所だったか」。そんな漠然とした記憶を確かなものにするため、人々はホトカミに記録を残す。

ユーザーの半数が投稿理由に挙げる「自分のための記録」。この極めて個人的な動機こそが、ホトカミという「集合知」の揺るぎない土台を築いていることに、取材を通して気づかされた。

一つひとつの投稿は、参拝者自身の旅の記録であり、備忘録である。しかし、それらが無数に集積されたとき、個人の記録は「みんなの記憶」へと姿を変える。

ガイドブックには載らない境内の空気、坐禅会に参加した素直な感想、心に残ったお守りの話。そんな血の通った情報が、寺社の多面的な魅力を浮かび上がらせる。

自分のために残した足跡が、意図せずして、後から来る誰かの道しるべとなる。自分の体験が、誰かの新しい体験のきっかけになる。ホトカミという場は、そんな優しさの連鎖を支えている。

自分のため、そして誰かのため。その循環こそが、このサイトの心臓部なのだ。

